

壊山物語と現地調査から考察した享保5年の福岡県うきは市冠地区の土石流災害

西山浩司*・井浦憲剛**

*九州大学大学院工学研究院, **うきは市役所

1. はじめに

現在、土砂災害警戒区域や洪水浸水区域などの情報を含むハザードマップを通して、地域の災害リスクを知ることができる。しかし、ハザードマップだけでは、災害の具体的なイメージを想像することが難しく、緊急時の避難行動に繋がらない可能性がある。災害が最近起こっていれば、映像などを通して災害の怖さを実感することができるが、現実的には、災害は同じ地域に頻繁に起こるわけではなく、人間の寿命の中で、災害の経験を生かすことが難しく、長い歴史の中で災害が起こっていても、その伝承が途絶えてしまっていることもある。従って、江戸時代まで遡って、地域に残されている古記録、古文書、言い伝えなどの災害伝承を探して編纂し、具体的な災害のイメージを沸きやすくする取り組みが必要になってくる。

その取り組みを具体的に進める地区として、300年前の享保5年、深刻な土石流災害に見舞われた福岡県うきは市冠地区を対象にする。図1に示すように、冠地区は、耳納山地の最高峰、標高801mの鷹取山の北側山麓に位置している。また、耳納山地の北斜面は勾配が急なため、深い谷筋からの土石流に警戒する必要がある。土砂災害警戒区域に指定されている。特に、谷筋AとCは谷が深いため要警戒である。冠地区を含め、耳納山地の山麓地域は高齢化が進んでいることから、実際に起こった土石流(当時は山汐と呼んでいた)を具体的に想像できて、地区ごとに高齢者が適切に避難できる対策が急務である。

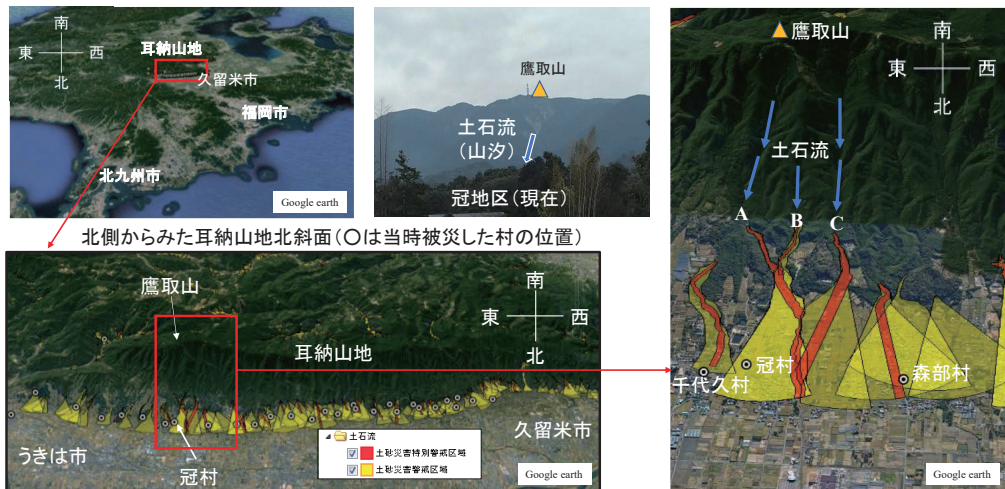


図1 福岡県筑後地方耳納山地にあるうきは市冠地区の土石流災害リスク。右図のA, B, Cは冠地区に被害を与える可能性のある谷筋を示す。

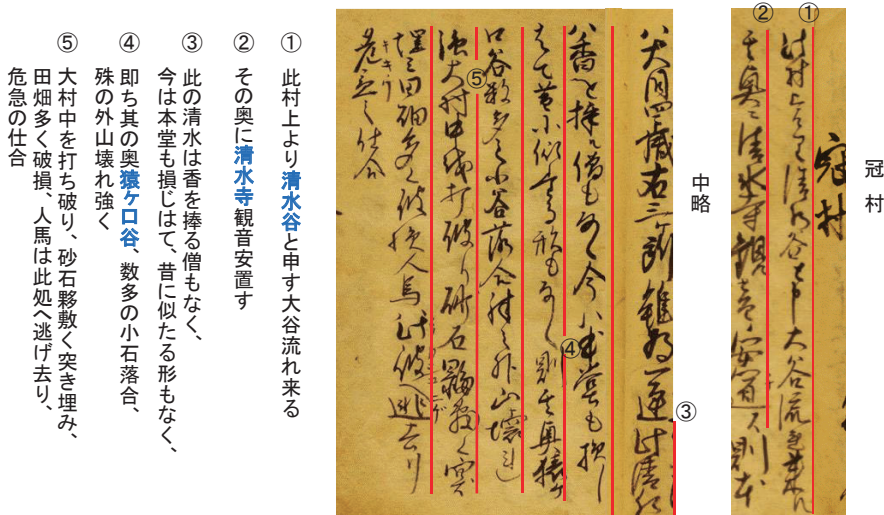


図2 うきは市冠地区（旧冠村）の享保5年（1720）の土石流災害記録

そこで本研究では、当時の耳納山地山麓の村々を訪ねて土石流の特徴や被害状況を記録した「壊山物語」¹⁾と郷土資料に基づき、また現地調査を通して、当時の冠村のどの谷筋が被害をもたらしたかについて考察し、ハザードマップに記載された土砂災害警戒区域との関連を明らかにする。

2. 冠地区（享保5年当時の冠村）の災害記録

耳納山地は、昭和28年の西日本大水害の際に土石流（うきは市延寿寺地区）が発生しているが、それ以降は大規模な土石流災害はない。しかし、300年前に遡ると、享保5年（1720）に当時の筑前・筑後国で梅雨明け前の大規模な豪雨が発生しことがわかっており、最も被害が激しかった地域が耳納山地の山麓の村々であった²⁾。壊山物語¹⁾によると、当時の安富村、屋形村、延寿寺村は50名以上の死者を出し、田畑も家屋も破壊されて全滅に近い惨事となった。また、大きな岩がぶつかって犠牲者の身元が判明しないほど遺体が損傷し、首のない我が子を抱いて必死に介抱している姿や、鳥や鶯が土砂から現れた遺体に集って食べていたなどの悲話も残されている。

その災害では、延寿寺・安富・屋形地区の西側に位置する冠村でも壊山物語¹⁾の被災記録（図2）があり、土石流が村を襲い、砂や石に埋もれて田や畑の多くが被害を受けた。幸い、人や馬はあちこちに逃げて命は助かっている。図2の記載には地理的な情報が含まれており、土石流が発生した谷は清水谷で、その近くに清水寺観音様が安置されていること、さらに上流には猿ヶ口谷があることが示されている。また、図2の④の文では、猿ヶ口谷を有する山岳上部は崩壊が特に酷く、小石が落ちてきて猿ヶ口谷に集まっている特徴が読み取れる。

3. 土石流が発生した谷筋の位置の特定

前節で示したように、文献からは清水谷と猿ヶ口谷は同じ谷筋を示していると考えられる。この節では、文献調査と現地調査の結果を照らし合わせて、冠地区に被害を及ぼすと考えらえる3つの谷筋A、B、Cから、享保5年の土石流（山汐）を引き起こした谷筋を特



図3 図1の谷筋Aに沿った字図と現地調査で得られた遺構
 (a) 清水寺跡(推定)に残る板碑 (b) 谷筋A周辺の小字地名 (c) 清水城跡の曲輪

定する．ここで手がかりとなった文献が、昭和41年に発行された浮羽郡誌³⁾と戦前に発行された郷土研究「筑後」⁴⁾である．この中に、久留米藩が行った寛文8年の城跡の調査記録、そして、村々の庄屋さんから村の神社や城跡などに関する言い伝えを寛延2年に記録した「寛延記」が紹介されている．寛延記によると、「清水城と申伝候 耳納山筋の有之候 城主の時代相知れ申さず候」と記されているが、南朝方と北朝方に分かれて戦乱が絶えなかった南北朝時代に、この地域に拠点を置く豪族の星野氏が多くの山城を築いていることから、この時代に関連する城と考えられる．さらに、中世の城郭を調査した報告書⁵⁾によると、清水城は冠地区南側の山麓に近い尾根の平坦地に築かれていることがわかった(図3b)．実際、図3cに示すように、城の防御のために尾根や山の頂部を平坦にした曲輪らしき構造が見られ、その西側には谷筋Aがあることがわかった．

以上のように、江戸時代の人々が清水城跡と呼んでいたこと、清水城跡が竹野郡と生葉郡の境に位置し、山麓に清水寺跡があると言い伝えが残る地点があるという浮羽郡誌の記述から、清水寺跡が清水城跡の近くにあることが推測できる．地元の方によると、冠地区上方に清水寺に関連する石碑があるという情報を得たので実施に行ってみると、その位置は、谷筋Aの西側で、清水城跡の南西側の平坦地(図3b)に石碑が存在していた．その石碑は鎌倉時代後期から南北朝時代に流行した板碑(供養塔)の可能性がある．石碑の中央に円が描かれているが(図3a)、これは月輪と呼ばれ、その中に梵字が記載されていることが一般的である．しかし、この板碑は風化が激しく、中央の梵字が確認できず、下方に字があるが読み取ることができない．もし供養塔であれば、寺の施設が存在したことが推測できる．また、その場所は平坦地であり、複数の施設を建設できる広さを持っている．

最後に、谷筋A周辺の小字名を調べてみると、谷筋Aを挟んで位置する東側の清水城跡と西側の清水寺跡の上流側に、猿ヶ口という小字名(図3b)があることがわかった．図2の壊山物語「其の奥猿ヶ口谷」という記述の中で、其の奥とは清水寺の上流側という意味なので、字図に示された小字名の猿ヶ口の位置と矛盾しない．以上の結果から、享保5年に発生した土石流は、谷筋Aに沿って冠地区を襲ったことがわかった．

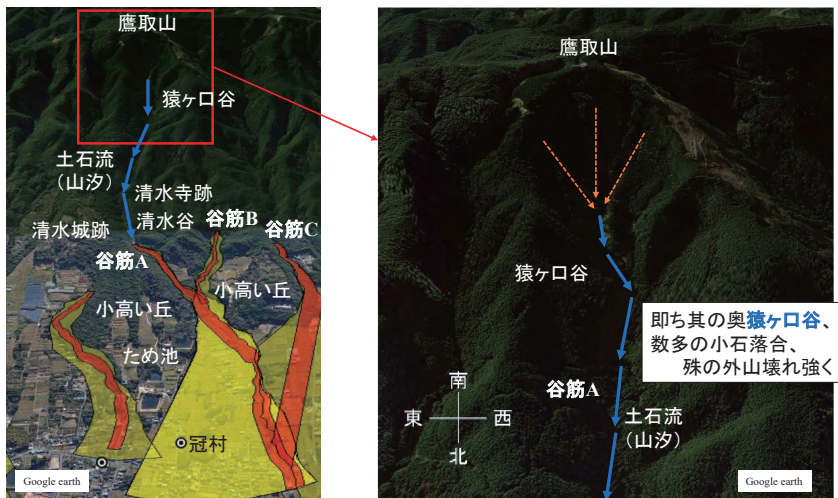


図4 当時の冠村を襲った土石流災害の全容（推定）

4. 結論

以上の結果をまとめると、文献調査と現地調査から清水城跡、清水寺跡、小字名の猿ヶ口の位置がわかり、享保5年に冠村を襲った土石流は谷筋Aであることが特定できた（図4）。その下流側の谷が清水谷、上流側の谷が猿ヶ口であり、鷹取山の頂上へと繋がっている。猿ヶ口谷上方の頂上付近は急勾配となっており、壊山物語が示す通り、崩壊すると土石流のリスクが大きいことがわかる。従って、土砂災害警戒区域が示す通り、鷹取山頂上付近が崩れると、土石流は猿ヶ口谷、そして、清水城跡と清水寺跡の間にある清水谷を通して、冠地区を襲うことになる。特に、冠地区の西側は土石流特別警戒区域に指定されて災害リスクが最も大きく、谷筋Aだけでなく、谷筋Cからの土石流にも警戒が必要である。

従って、豪雨の際には、土砂災害特別警戒区域に指定された冠地区の西側から離れ、できる限り下流側（南側）に避難することが肝要である。また、壊山物語から想像できるように、家屋の被害だけでなく、柿などの果樹園の被害も十分想定しておく必要もある。さらに、高齢者が多い地区なので、災害学習会、防災街歩き、適切な避難訓練を通して、情報伝達の方法、避難タイミングなどの懸案事項について平常時から十分に議論し、短時間で襲ってくる土石流に対する対応策を地区全体で講じることが重要になってくる。

参考文献：

- 1) 作者不詳：壊山物語，うきは市立浮羽歴史民俗資料館所蔵，1720（享保5年）。
- 2) 立石晁：福岡県近世災異誌，福岡県近世災異誌刊行会，913p, 1992。
- 3) 浮羽郡誌吉井町編集委員会：浮羽郡誌，浮羽郡誌刊行会，580p, 1966。
- 4) 古賀基二：星野氏の諸城址踏査記，郷土研究 筑後，pp.7-24, 第6巻3号, 1938。
- 5) 福岡県教育委員会：福岡県の中近世城郭IV，334p, 2017。

謝辞：

うきは市冠地区の住民、並びに、郷土史家の方には、地区に残る石碑、神社、清水寺に関する貴重な情報を頂きました。また、この研究は、JSPS 科学研究費（課題番号 20K01144）の助成を受けたものです。ここに深く感謝申し上げます。